

## 『詩経』から見た色彩語

劉 渴 氷

### 1. はじめに

本論文は漢代の五行思想によって固定化された「五色」の「青, 赤, 黄, 白, 黒」を, Berlin と Kay の基本色彩語体系の基準点とし, 主として周代の色彩語彙体系を明らかにしてみたいと思う。本論文は『詩経』を主なテキストにする。『詩経』は中国の最も古い詩集であり, 『易』『書』『礼』『春秋』とともに, 経典として後世に伝えられた。『詩経』に収められている詩は, 西周から東周にかけてつくられたというのが通説である。『詩経』三百余篇の詩は, 詳しくいえば, 国風百六十篇, 小雅八十篇, 大雅三十一篇, 頌四十篇, その内小雅の六篇は篇名ばかりで歌詞がないから, 実は三百五篇から成り, 古来詩三百と言われ故である。風とは各国の民謡, 雅とは朝廷の音楽, 頌は宗朝祭祀の楽歌である。

60年代末, Berlin と Kay は『基本顔色詞的普遍性と発展史』の中で新しく色彩語の語意の普遍性に対して論じた。中では基本色彩語について以下の四つの条件に基づいて定義した。

- ① 単一語素であること。すなわち語彙の構成成分から単語の意味を推測することができない。
- ② 独立した色彩意義を持ち, 意味分野が色彩に限定されること。
- ③ ある色彩語彙の指示領域が, 他の語彙の指示領域に含まれない

こと。

④ 心理上顕著で安定していること。

まず、Berlin と Kay の基本色彩語彙の基準を参考し、中国語の基本色彩語彙を明らかにしたいと思っている。考察の対象は『詩経』で使用されている色彩を表わす「黒、玄、幽、緇、白、素、鶩、皓、皎、赤、朱、赭、赭、赫、奭、彤、煒、黄、苍、绿、青、葱」の22語にする。今回は「驪」のような「黒い馬」を表す語彙が、意味分野が色彩と動物にまたがるため (Berlin と Kay の基準③)、考察対象外となる。例文は重複する場合一例のみあげ、日本語訳は目加田誠 (1969) を参考したものである。その後に出所各所を示す。

## 2. 『詩経』に見る「五色」

五行思想によって固定化された「五色」の「青、赤、黄、白、黒」に従い、『詩経』で現れる「黒、玄、幽、緇、白、素、鶩、皓、皎、赤、朱、赭、赭、赫、奭、彤、黄、苍、绿、青、葱」の22語を黒色類、白色類、赤色類、黄色類、青色類の五つに分ける。

### 2.1 黒色類

#### 2.1.1 黒

「黒」は『詩経』で2回しか現れなかった。

- (1) 莫赤匪狐，莫黒匪烏。(赤いは狐，黒いはカラス。)[邶・北風]
- (2) 以其駢黒，與其黍稷。(赤と黒の牲に，黍稷とり供え，神に捧げて祀りして。)[北山之什・大田]

朱子は狐，烏は不祥な物。どこを見てもこんな憎むべきものばかり，と解する。これをもし男女誘引の詩とすれば，狐は淫なるもの，冬に人里近く忍び寄る。烏も冬多く集まるもの，それを以て誘い寄る男たちに喩えると考えられる。ここでは偶然な可能性があると思われるが，例(1)と例(2)いずれも動物の色をあらわしている。『説文』には「黒」は「火所熏之色也」とある。『釋名・釋綵帛』に「黒晦也，如晦冥時色也。」とある。当時「黒」は縁起の悪い象徴をもつことばに思われる。例(2)の「黒」について，毛伝は「黒，羊豕也」という注がある。つまりここで黒い羊や豚の類を表わしている。つまり，基準②に抵触することになる。しかし，これは動物の毛色からその動物全体を現しているとも考えられる。

### 2.1.2 玄

「玄」は『詩経』で7回現れた。

- (1) 陟彼高岡，我馬玄黄。(高い岡に登れば，私の馬も疲れた。)[周南・卷耳]
- (2) 載玄載黄，我朱孔陽，為公子裳。(黄色や黒に，ひとときわ朱く染めたる布は，若殿さまのお召物。)[豳・七月]
- (3) 又何予之？玄衮及黼。(重ねては何をか賜わむ？赤黒き竜の衣ぬいの裳。)[桑扈之什・采菽]
- (4) 何草不玄？何人不矜？(いずれの草も玄く枯れぬはなく，いずれの人も一人にならぬはなく。)[都人士之什・何草不黄]
- (5) 玄衮赤舄，鉤膺鏤錫。(赤黒き竜の衣，赤き靴，馬の身の上の飾り物がキラキラ。)[蕩之什・韓奕]
- (6) 天命玄鳥，降而生商，宅殷土芒芒。(天は玄鳥に命じて，降って商の先祖婦契を生まれ，茫々として広き殷の地に宅らしめぬ。)[閔予小子之什・玄鳥]
- (7) 玄王桓撥，受小國是達。(商の始王契は大いに武勇あり，小国を受け

ても政よく行われ。)「閔予小子之什・長發」

「玄王」を除くと、「玄」の適用対象は「草, 鳥, 馬」である。「載玄載黄」は、紡いだ糸を「玄」や「黄」に染めることを指している。「玄袞」とは、卷龍の模様をついた「玄衣」である。所謂、「玄」に染められた衣を指している。いずれも染め色と関連している。毛傳に「玄, 黒而有赤也」とある。『説文』には「黒而有赤者爲玄」とある。朱子は「玄, 赤黒色也」とある。「玄」は「赤」を帯びた「黒」なので、典型的な「黒」ではないと考えられる。

例(6)の「玄鳥」について、『史記』によれば、殷の始祖契の母を簡狄という。玄鳥の卵を吞んで孕み、契を生んだという。毛伝では、「春分, 玄鳥が降る時, 簡狄が高辛氏と共に郊禡に祈って契を生んだ」とする。鄭玄はこれを感生説話として、簡狄がツバメの卵を吞んで契を生んだという説をとっている。

### 2.1.3 幽

「幽」は『詩経』で4回現れた。

- (1) 出自幽谷, 遷于喬木。(深き谷より, 高き木に遷る。)[鹿鳴之什・伐木]
- (2) 秩秩斯干, 幽幽南山。(澗の水清く流れ, 南山深く鎮まるところ。)[祈父之什・斯干]
- (3) 隰桑有阿, 其葉有幽。既見君子, 德音孔膠。(沢辺の桑のうるわしさ, その葉は深く茂っている。)[都人士之什・隰桑]
- (4) 有芄者狐, 率彼幽草。(毛深い狐は, 深草の間をかよう。)[都人士之什・何草不黄]

例(3)の「幽」について、朱子は「幽, 黒色」とあり。例(1), (2), (4)

は「幽深」とあり。これで「幽」は「深い」という意味をするだけでなく、色彩をも表していることが分かった。例(2)の「幽幽」は「深遠」という意味をし、人に抽象的な感覚を与えられる。従って、「幽」は基本色彩語彙ではないと考えられる。

#### 2.1.4 緇

「緇」は『詩経』で4回現れた。

- (1) 緇衣之宜兮，敝，予又改為兮。(黒き御衣の似合わしき，破れなばさら  
らに為りてむ。)「鄭・緇衣」
- (2) 緇衣之好兮，敝，予又改造兮。(黒き御衣の好ましき，破れなばさら  
に造りてむ。)「鄭・緇衣」
- (3) 緇衣之蓆兮，敝，予又改作兮。(黒き御衣のゆたけさよ，破れなばさ  
らに作りてむ。)「鄭・緇衣」
- (4) 彼都人士，臺笠緇撮。(都から来たあの方は，黒い冠にすげの笠。)  
「都人士之什・都人士」

「緇」の適用対象はすべて織物である。『説文』には「緇，帛黒色也」とある。朱子に「緇，黒色。緇衣，卿大夫居私朝之服也」とある。「緇」は黒色の絹幽深織物である。「緇衣」，黒い服をさす，卿士が朝廷で政を執るとき  
の服。『礼記』にも「賢を好むこと緇衣の如く」とか，「緇衣において賢を好むの至れるを知る」とかいつている。したがって，「緇」とは繊維製品  
の名称であり，色彩語彙ではないとも考えられる。また，色彩語であったとしても，その適用対象は限定され，基準④と抵触するため，基本色彩語彙とは考えられない。

### 2.1.5 黒色類のまとめ

「黒、玄、幽、緇」の適用対象を比べてみると以下のようなになる。

	『詩経』での適用対象	『詩経』	『説文』
黒	烏, 駢	黒色	火所熏之色也
玄	马, 裳, 袞, 草, 鳥, 王	黒而有赤	幽遠, 黒而有赤者
幽	山, 谷, 葉, 草	幽深, 黒色	隠也
緇	衣, 笠 (繊維製品)	黒色繊維製品	帛黒色也

図1

基準④に従い、「幽」と「緇」の適用対象は限定され、基本色彩語彙とは考えられない。『詩経』において、「黒」よりも「玄」のほうが使用例が多いである。使用例が多いと適用範囲も広いである。しかし、「玄」は典型的な「黒」ではないため、「玄」は「黒」の下位カテゴリーであり、基準③に抵触するため、「玄」は基本色彩語彙とは考えられない。

## 2.2 白色類

### 2.2.1 白

「白」について、『詩経』で23例が見られる

- (1) 野有死麋, 白茅包之。(野辺の死じかは, ちがやで包む。)[召南・野有死麋]
- (2) 有死鹿, 白茅純束。(野辺の死鹿は, ちがやで包め。)[召南・野有死麋]
- (3) 揚之水, 白石鑿鑿。(はげしい流れ, 白い石キラキラ。)[唐・揚之水]

- (4) 揚之水，白石皓皓。(はげしい流れ，白い石真っ白。)[唐・揚之水]
- (5) 揚之水，白石粼粼。(はげしい流れ，白い石ピカピカ。)[唐・揚之水]
- (6) 有車鄰鄰，有馬白顛。(車りんりん，馬白額。)[秦・車鄰]
- (7) 蒹葭蒼蒼，白露為霜。(あしの葉はあおあおとして，白露はいつか置く霜。)[秦・蒹葭]
- (8) 蒹葭淒淒，白露未晞。(あしの葉はさむく茂りて，白露はいまだ乾かず。)[秦・蒹葭]
- (9) 蒹葭采采，白露未已。(あしの葉はさむく色づき，白露はいまだ已まず。)[秦・蒹葭]
- (10) 織文鳥章，白旆央央。(鳥を画きし旗じるし，きぬのはたあし鮮やかに。)[彤弓之什・六月]
- (11) 皎皎白駒，食我場苗。(ま白き駒，わが場の苗食めば。)[祈父之什・白駒]
- (12) 皎皎白駒，食我場藿。(ま白き駒，わがにわの豆食めば。)[祈父之什・白駒]
- (13) 皎皎白駒，賁然來思。(ま白き駒，かがやかに来ませば。)[祈父之什・白駒]
- (14) 皎皎白駒，在彼空谷。(ま白き駒，深き谷間に。)[祈父之什・白駒]
- (15) 裳裳者華，或黄或白。(かがやく花よ，黄色に白に。)[北山之什・裳裳者華]
- (16) 白華菅兮。(野の菅は水に浸して。)[都人士之什・白華]
- (17) 白茅束兮。(白い茅で束ねるものを。)[都人士之什・白華]
- (18) 英英白雲，露彼菅茅。(空に浮かぶ白雲も，夜露に茅を潤すのに。)[都人士之什・白華]
- (19) 有豕白蹄，烝涉波矣。(豕あり蹄白く，川波をすすみて渉る。)[都人士之什・漸漸之石]
- (20) 麀鹿濯濯，白鳥嚶嚶。(牝鹿は肥えてつややかに，白鳥は白く輝く。)[文王之什・靈臺]
- (21) 白圭之玷，尚可磨也。(白玉のかけたのは，磨けばなおも磨かれる。)

「蕩之什・仰」

(22) 有客有客，亦白其馬。(まろうどよまろうどよ，さてもその白き馬。)

「臣工之什・有客」

(23) 白牡騂剛，犧尊將將。(白き牡牛赤き牡牛を生け贄に，犧牛形の酒樽も美々しく。)[魯頌・閟宮]

例(1)，(2)の「白茅」について，注に「南國被文王之化女子，有貞潔自守，不為強暴所汚者。故詩人因所見，以興其事而美之，或曰賦也。言美士以白茅包其死麕，而誘懷春之女也」とある。白茅は清いもので，礼物を包んだり，しいたりするのに用いる。婚礼に鹿の皮を持ってゆく習慣もある。例(10)の「白旒央央」の「白」は「帛」の借字である。例(11)，(12)，(13)，(14)の「白駒」について，序によれば，殷の王族の微子が来て周の廟に参るのだという。そしてその毛伝に，殷は白を尊ぶとあり。殷の微子が白馬に乗ってきたのを，永く引き止めたいと願う詩になっている。

「白」の適用対象は広く，植物の「茅，華」，動物の「馬，駒，豚，鳥，牡」，無生物の「石，露，雲，圭」などに及ぶ。「白」は基本色彩語彙である。

## 2.2.2 素

「素」について、『詩経』では15例が見られる。

(1) 羔羊之皮，素絲五紵。(子羊の皮ごろも，白い絹糸五つの飾り。)[召南・羔羊]

(2) 羔羊之革，素絲五緘。(子羊の革ごろも，白い絹糸五つの飾り。)[召南・羔羊]

(3) 羔羊之縫，素絲五總。(皮ごろもの縫目につけた，白い絹糸の五つの飾り。)[召南・羔羊]

(4) 素絲紕之，良馬四之。(組んだ白糸，良き馬四つ。)[鄘・干旄]



- (5) 素絲組之，良馬五之。(組んだ白糸，良き馬五つ。)[鄘・干旄]
- (6) 素絲祝之，良馬六之。(束ねた白糸，良き馬六つ。)[鄘・干旄]
- (7) 俟我於著乎而，充耳以素乎而。(我待つとかどに立つ人，耳あてに白き組み糸。)[齊・著]
- (8) 彼君子兮，不素餐兮。(あの御身分の殿方は，働きもせずに食えるのか。)[魏・伐檀]
- (9) 彼君子兮，不素食兮。(あの御身分の殿方は，働きもせずに食えるのか。)[魏・伐檀]
- (10) 彼君子兮，不素飧兮。(あの御身分の殿方は，働きもせずに食えるのか。)[魏・伐檀]
- (11) 素衣朱褌，從子于沃。(白い衣に朱いえり，曲沃さまに仕えよう。)[唐・揚之水]
- (12) 素衣朱繡，從子于鵠。(白い衣に朱いぬい，曲沃の御前に仕えよう。)[唐・揚之水]
- (13) 庶見素冠兮，棘人樂樂兮。(幸いに白い冠着たあの人に会い，喪にやつれた面影よ。)[檜・素冠]
- (14) 庶見素衣兮，我心傷悲兮。(幸いに白い着物を着たあの人に会い，私の胸の悲しさよ。)[檜・素冠]
- (15) 庶見素鞞兮，我心蘊結兮。(幸いに白い膝掛したあの人に会い，私の胸はむすぼれる。)[檜・素冠]

例(8)，(9)，(10)の「素」は毛伝が「空也」と述べるものを除いて，その適用対象はほぼ全てが繊維製品である。適用対象が限定されるため，基準④と抵触するため，基本色彩語彙ではないと考えられる。『説文』には「素，白致繒也」とある。段御裁は「素，生帛也，然則生帛曰素，對凍繒而言，以其色白也，故爲凡白之稱」とある。所謂，「素」は本来染色していない白い絹を表わしていた。やがて，色彩の「白」も表わすようになったのである。

### 2.2.3 嚳

「嚳」は『詩経』で1回しか現れなかった。

- (1) 麀鹿濯濯，白鳥嚳嚳。(牝鹿は肥えてつややかに，白鳥は白く輝く。)  
「文王之什・靈臺」

朱子に「嚳嚳，潔白貌」とある。白く輝く様子を指している。従って，「嚳」は基本色彩語彙ではないと考えられる。

### 2.2.4 皓

「皓」は『詩経』で2回しか表れなかった。

- (1) 揚之水，白石皓皓。(はげしい流れ，白い石真っ白。)  
「唐・揚之水」  
(2) 月出皓兮，佼人憫兮。(月いでて冴えたり，良き人のうるわしさよ。)  
「陳・月出」

「皓」の適用対象は「石，月」などの自然物である。毛伝に「皓皓，潔白也」とある。『爾雅』釋詁に「皓，光也」とある。つまり「光のように輝く白色」のことである。「嚳」と同じように，「皓」は基本色彩語彙ではないと考えられる。

### 2.2.5 皎

「皎」は『詩経』で5回現れた。

- (1) 皎皎白駒，食我場苗。(ま白き駒，わが場の苗食めば。)  
「祈父之什・

白駒」

- (2) 皎皎白駒，食我場藿。(ま白き駒，わがにわの豆食めば。)[「祈父之什・白駒」]
- (3) 皎皎白駒，賁然來思。(ま白き駒，かがやかに来ませば。)[「祈父之什・白駒」]
- (4) 皎皎白駒，在彼空谷。(ま白き駒，深き谷間に。)[「祈父之什・白駒」]
- (5) 月出皎兮，佼人僚兮。(月いでてさやかなり，良き人のうるわしさよ。)[「陳・月出」]

「皎」の適用対象は「駒，月」などの自然物である。この「皎」は，毛伝に「皎，月光也」とある。『説文』に「月之白也」とある。つまり「皓」と同様に，「光のように輝く白色」である。したがって，基本色彩語彙ではないと考えられる。

## 2.2.6 白色類のまとめ

従って，「白，素，皐，皓，皎」の適用対象が以下のようにまとめられる。

	『詩経』での適用対象	『詩経』	『説文』
白	茅，石，顛，露，駒，華，雲，躋，鳥，圭，馬，牡	白色	西方色也。陰用事，物包白
素	絲，耳，餐，食，殮，衣，冠，鞞	白空也	白致繒也
皐	鳥	潔白貌	鳥白肥澤兒
皓	石，月	潔白也	なし
皎	駒，月	月光也	月之白也

図2

Berlin と Kay の基本色彩語彙の基準に従い、「素、鶯、皓、皎」の適用対象が限定されているため、基本色彩語彙ではないと考えられる。「白」の適用対象は広く、植物の「茅、華」、動物の「馬、駒、豚、鳥、牡」、無生物の「石、露、雲、圭」などに及ぶ。「白」は基本色彩語彙である。

## 2.3 赤色類

### 2.3.1 赤

「赤」が『詩経』で7回現れた。その例文は以下のようになる。

- (1) 莫赤匪狐，莫黒匪鳥。(赤いは狐，黒いはカラス。)[邶・北風]
- (2) 彼其之子，三百赤芾。(あれあの方は三百の，赤の朝服つけたその一人。)[曹・候人]
- (3) 公孫碩膚，赤舄几几。(貴族は大きいなお腹で堂々と，赤いおんくつしずしずと。)[豳・狼跋]
- (4) 赤芾金舄，會同有繹。(赤い前垂小金の靴，あつまる諸侯引きも切らず。)[彤弓之什・車攻]
- (5) 赤芾在股，邪幅在下。(その股に赤い膝掛，その下にはばきまといて。)[桑扈之什・采芣]
- (6) 玄衮赤舄，鉤膺鏤錫。(赤黒き竜の衣，赤き靴，馬の身の上の飾り物がキラキラ。)[蕩之什・韓奕]
- (7) 獻其貔皮，赤豹黄羆。(ひ獣の皮，赤き豹，黄なる熊を貢ぎまいらす。)[蕩之什・韓奕]

例(1)の「赤」については、毛伝は「狐赤鳥黒莫能別也。箋云、赤則狐也、黒則鳥也。猶今君臣相承為惡如一」とある。箋に君臣一様に悪をなすこととする。例(2)の「赤芾」について、朱子は「赤芾，黝珩。赤芾，葱珩大夫以上赤芾乘軒」とある。ここの「赤芾」は赤い膝おおい。諸侯の卿，大

夫の服。これをつけるのは立派な役人。これをつけたのは三百人。例(3), (6)の「赤舄」は「赤舄, 人君之盛履也」とある, 赤い靴をさしている。例(4)は「赤芾, 金舄舄達履也」, 例(5)「赤芾, 邪幅幅偏也」とある。「赤」の適用対象は「狐, 豹」などの動物から, 「舄, 芾」といった工物に及ぶ。従って, 「赤」は基本色彩語彙である。

### 2.3.2 朱

「朱」が『詩経』で8回現れた。その例文は以下のようになる。

- (1) 朱幘鑣鑣, 翟芾以朝。(あかの飾りがくつわに映えて, 雉の羽車もて輿入れたもう。)[衛・碩人]
- (2) 載驅薄薄, 簟芾朱鞞。(馬蹄の響きポクポクト, 網代のおおい, あかの革。)[齊・載驅]
- (3) 素衣朱褕, 從子于沃。(白い衣に朱いえり, 曲沃さまに仕えよう。)[唐・揚之水]
- (4) 素衣朱繡, 從子于鵠。(白い衣に朱いぬい, 曲沃の御前に仕えよう。)[唐・揚之水]
- (5) 我朱孔陽, 爲公子裳。(一際あかく染めたる布は, 若殿さまのお召し物。)[豳・七月]
- (6) 朱芾斯皇, 有瑋葱珩。(あかの前垂かがやかに, 青色の玉の音も清し。)[彤弓之什・采芑]
- (7) 朱芾斯皇, 室家君王。(やがてはあかの前垂かがやかに, 家のあるじ国の君王。)[祈父之什・斯干]
- (8) 朱英綠騰, 二矛重弓。(二つの矛には朱の飾り, 重ねし弓は緑のひもまとい。)[魯・閔宮]
- (9) 公徒三萬, 貝冑朱綬。(公の徒立ち三万は, 貝もて飾りし, 冑に朱糸の緘。)[魯・閔宮]

例(5)の「我朱孔陽，為公子裳」について、「朱，深纁也。陽明也。玄，祭服。玄衣，纁裳」とある。「考工記」に「再入謂之赭，三入謂之纁，朱則四入矣。以上染朱入數，書傳無文，故約之以為四入也。三則為纁，四入乃成朱，色深於纁，故云朱深纁也。陰陽相對，則陰闇而陽明矣。朱色無陰陽之義，故以陽為明，謂朱色光明也」とある。「朱」の適用対象は、全て人工物である。例(2)の「朱」について、朱子は「漆也」と述べている。適用対象が限定されていて、基本色彩語彙とは考えられない。

### 2.3.3 赭

「赭」は『詩経』で1回しか現れなかった。

- (1) 魴魚赭尾，王室如燬。(ほうは赤い尾をふり，疲れた様子，お上の用は急ぐような。)「周南・汝墳」

毛伝には「赭，赤也。魚勞則尾赤」とある。魚が疲れると尻尾が赤くなると言っている。『爾雅』釋器には「一染謂之纁，再染謂之赭，三染謂之纁，青謂之蔥，黑謂之黝」とある。これは，染色の方法について述べたものである。染色された繊維製品を表わしていると考えられる。『説文』には「赭，赤色也」とある。しかし，『爾雅』釋器の郭注は「赭，即淺赤也」とある。「赭」は「赤」の下位カテゴリーであったと考えられる。

### 2.3.4 赭

「赭」も『詩経』で1回しか現れなかった。

- (1) 赫如渥赭，公言錫爵。(まるで赤色を塗ったように赤く，公より賜うおん杯。)「邶・簡兮」

「赭」について、朱子は「赭，赤色也。言其顔色之充盛也」とあるが、『説文』には「赤土也」とある。色彩語彙とは考えられない。

### 2.3.5 赫

「赫」は『詩経』では20回現れた。例(2)が2回、例(3)が3回現れた。

- (1) 赫如渥赭，公言錫爵。(まるで赤色を塗ったように赤く，公より賜うおん杯。)[邶・簡兮]
- (2) 瑟兮僩兮，赫兮咺兮。(厳かにまたたけく，かがやかにあきらけし。)[衛・淇奥]
- (3) 赫赫南仲。(武威赫々の南仲。)[鹿鳴之什・出車]
- (4) 赫赫師尹，民具爾瞻。(権勢赫々たる師尹は，民皆そなたを仰ぎみる。)[祈父之什・節南山]
- (5) 赫赫師尹，不平謂何。(権勢赫々たる師尹の，偏った政をなんとしよう。)[祈父之什・節南山]
- (6) 赫赫宗周，褒姒威之。(赫々たる宗周も，ほうじのために亡ぶものを。)[祈父之什・正月]
- (7) 明明在下，赫赫在上。(明明き徳下土にあれば，かがやかに天に現れる。)[文王之什・大明]
- (8) 皇矣上帝，臨下有赫。(大いになる天帝は，明らかに下に臨みたまい。)[文王之什・皇矣]
- (9) 王赫斯怒，爰整其旅。(王は急に怒りだして，軍人を場整えて。)[文王之什・皇矣]
- (10) 無菑無害，以赫厥靈。(災いに会わずに，かくてその靈をあらわせり。)[生民之什・生民]
- (11) 既之陰女，反予來赫。(爾の禍を庇おうとすれば，反って私を激しく怒る。)[蕩之什・桑柔]
- (12) 赫赫炎炎，云我無所。(ただ赫々と照り付けて，我が身を容れる所

- もない。)「蕩之什・雲漢」
- (13) 赫赫明明，王命卿士。(かがやかに明らけく王は，卿士を命じ。)  
「蕩之什・常武」
- (14) 赫赫業業，有嚴天子。(かがやかにまた壮んに，神靈加護あるわが天子。)  
「蕩之什・常武」
- (15) 赫赫姜嫄，其德不回。(輝かしき先妃，その恩徳たがわず。)  
「魯頌・閟宮」
- (16) 於赫湯孫，穆穆厥聲。(ああ輝かしき湯の孫，ゆかしきかなその音楽。)  
「商頌・那」
- (17) 赫赫厥聲，濯濯厥靈。(かがやかなるその声，明らけきその威靈。)  
「商頌・殷武」

例(1)の「赫」は毛伝に「赫，赤貌」とある以外に，そのほかに「赫有明德，赫然是内有其德，故發見於外也」とある。従って，「赫」の使用例の多くは「顯」，「盛」という意味で現れた。例(1)だけは「赤く輝いた光」という意味になる。色彩だけではなく，光も関係しているために，BerlinとKayの基本色彩語彙の基準に従い，基本色彩語彙ではないと考えられる。

### 2.3.6 奭

「奭」は『詩経』で2回しか現れなかった。

- (1) 路車有奭，簟第魚服。(御大将の赤車，あじろの覆い魚皮の箪。)  
「彤弓之什・采芑」
- (2) 韎韐有奭，以作六師。(アカネの前垂かがやかに，六つの軍をおこします。)  
「北山之什・瞻彼洛矣」

「奭」の適用対象は「路車，韎韐（皮製の膝掛け）」である。毛伝に「奭，赤貌」とある。『説文』には「奭，盛也」とあるため，BerlinとKayの基



本色彩語彙の基準に従い、「奭」は基本色彩語彙とは考えられない。

### 2.3.7 彤

「彤」は『詩経』では5回現れた。

- (1) 靜女其嬈，貽我彤管。(可愛いあの子の器量よし，私にくれたアカイクダ。)[邶・靜女]
- (2) 彤管有煒，說懌女美。(アカイその管赤い色，ほんに嬉しい美しさ。)[邶・靜女]
- (3) 彤弓昭兮，受言藏之。(そつたる赤弓，受けて収めよ。)[彤弓之什・彤弓]
- (4) 彤弓昭兮，受言載之。(そつたる赤弓，受けて載せよ。)[彤弓之什・彤弓]
- (5) 彤弓昭，受言囊之。(そつたる赤弓，受けて包みよう。)[彤弓之什・彤弓]

箋には「彤管，筆赤管也」とある。朱子は「彤管」について「不明」と述べたが、「彤」は赤い色と解釈した。毛，鄭の説のように，古，后妃夫人の行動を記録した赤い筆と解した。『説文』では、「彤」は「丹飾也」とある。「丹」は「巴越之赤石」である。したがって、「彤」は顔料と関連する語彙と考えられる。「彤」は基本色彩語彙とは考えられない。

### 2.3.8 煒

「煒」は『詩経』では1回しか現れなかった。

- (1) 彤管有煒，說懌女美。(アカイその管赤い色，ほんに嬉しい美しさ。)[邶・靜女]

「焯」について、毛伝に「赤貌」とある。「説文」には「焯，盛赤也」とある。「赤」の下位カテゴリーであったと考えられる。

### 2.3.9 赤色類のまとめ

「赤，朱，赭，赭，赭，赭，赭，焯」の適用対象は以下のようにまとめられる。

	『詩経』での適用対象	『詩経』	『説文』
赤	動物，工物	赤色	南方色也
朱	繊維製品，工物	赤色の染料	赤心木
赭	尾	赤也	赤色也
赭	爵	赤色也，顔色之充盛	赤土也
赭	爵	赤貌	火赤兒
赭	路車，韎韜	赤貌	盛也
彤	管，弓	赤色	丹飾也
焯	管	赤貌	盛赤也

図3

従って、「赤」の適用対象は「狐，豹」などの動物から、「烏，芾」といった工物に及ぶ。従って、「赤」は基本色彩語彙である。「朱，赭，赭，赭，赭，焯」の適用対象は限定されて，基本色彩語彙ではないことが分かった。「朱，赭，赭，赭，赭，焯」は「赤」の下位カテゴリーである。

## 2.4 黄色類

「黄」について、『詩経』で36も現れた。例(22)が3回現れた。なお「黄」の下位カテゴリーは『詩経』では見られない。

- (1) 黄鳥于飛，集于灌木。(黄鳥は飛んで，やぶに群がり。)[周南・葛覃]
- (2) 陟彼高岡，我馬玄黄。(高い岡に登れば，私の馬も疲れた。)[周南・卷耳]
- (3) 緑兮衣兮，緑衣黄裏。(緑の衣，緑の衣に黄の裏よ。)[邶・緑衣]
- (4) 緑兮衣兮，緑衣黄裳。(緑の衣，緑の衣に黄の裳。)[邶・緑衣]
- (5) 睨睨黄鳥，載好其音。(鶯さえも春来れば，好き音に人を喜ばす。)[邶風・凱風]
- (6) 桑之落矣，其黄而隕。(桑の葉が散りだすと，黄色く凋んで落ちてゆく。)[衛・氓]
- (7) 叔于田，乘乘黄。(若者狩に出かけ，車につけた四つの黄馬。)[鄭・大叔于田]
- (8) 俟我於堂乎而，充耳以黄乎而。(我待つと土間に立つひとつ，耳宛に黄なる組み糸。)[齊・著]
- (9) 交交黄鳥，止于棘。(黄鳥は棘に止まり，こうこうと囀っている。)[秦・黄鳥]
- (10) 交交黄鳥，止于桑。(黄鳥は桑に止まり，こうこうと囀っている。)[秦・黄鳥]
- (11) 交交黄鳥，止于楚。(黄鳥は楚に止まり，こうこうと囀っている。)[秦・黄鳥]
- (12) 何以贈之，路車乘黄。(何をか贈る，車に黄毛馬。)[秦・渭陽] 乘黄，四馬皆黄也。
- (13) 載玄載黄，我朱孔陽，為公子裳。(黄色や黒に，ひときわ朱く染めたる布は，若殿さまのお召物)[豳・七月]
- (14) 樂只君子，遐不黄耆。(楽しき君子は，いや老いむまで。)[白華之什・南山有臺]
- (15) 四黄既駕，兩驂不猗。(車につけた四つの黄毛，脇のそえ馬かたよらず。)[彤弓之什・車攻]
- (16) 黄鳥黄鳥，無集于穀。(黄鳥は茨に止まり，こうこうと囀っている。)[祈父之什・黄鳥]

- (17) 黄鳥黄鳥，無集于桑。(黄鳥は桑に止まり，こうこうと囀っている。)  
「祈父之什・黄鳥」
- (18) 黄鳥黄鳥，無集于栩。(黄鳥はイバラに止まり，こうこうと囀っている。)  
「祈父之什・黄鳥」
- (19) 裳裳者華，芸其黄矣。(かがやく花よ，黄色にもゆる。)  
「北山之什・裳裳者華」
- (20) 彼都人士，狐裘黄黄。(都からきたあの方は，黄色い狐の皮衣。)  
「都人士之什・都人士」
- (22) 緜蠻黄鳥，止于丘。(華麗な黄鳥は，岡山のくまに止まれど。)  
「都人士之什・緜蠻」
- (23) 苕之華，芸其黄矣。(のうぜんかずら，黄色に咲けど。)  
「都人士之什・苕之華」
- (24) 何草不黄，何日不行。(いずれの草も黄色く枯れぬはなく，いずれの日も旅行かぬ日と手はない。)  
「都人士之什・何草不黄」
- (25) 瑟彼玉瓚，黄流在中。(キメ精しき玉柄の酌に，黄金の酒ゆらぎたり。)  
「文王之什・旱麓」
- (26) 芴厥豊草，種之黄茂。(茂れる草を打ち払い，ここによききびを種まけば。)  
「生民之什・生民」
- (27) 酌以大斗，以祈黄耆。(大杓に酌んで，長生きを祈る。)  
「生民之什・行葦」
- (28) 黄耆台背，以引以翼。(梨の面ふぐの背とまで，その寿を長くたすけて。)  
「生民之什・行葦」
- (29) 獻其貔皮，赤豹黄熊。(ひ獸の皮，赤き豹，黄なる熊を貢ぎまいらす。)  
「蕩之什・韓奕」
- (30) 有驪有黄，以車彭彭。(黒いのもあれば，黄色のもある，車力強く引く。)  
「魯頌・駟」
- (31) 有駟有騶，騶彼乘黄。(たくましきたくましい，たくましき四つの黄馬。)  
「魯頌・有駟」
- (32) 黄髮台背，壽胥於試。(黄になる髪，ふぐの背とまで，寿をともに

比べせむ。)「魯頌・閟宮」

- (33) 既多受祉，黄髮兒齒。(幸い多く受けまして，黄髮に再び児齒を入った。)「魯頌・閟宮」
- (34) 綏我眉壽，黄耆無疆。(われに永き齡，限りなく永き命をたまえ。)「商頌・烈祖」

例(1)，(5)，(9)，(10)，(11)，(16)，(17)，(18)，(22)の「黄鳥」は黄色い鳥で鶯をさしている。例(2)の「玄黄」について「玄馬而黄病極而變色也」とある。ここでは馬が病気で黄色になった様子を指している。例(3)，(4)，(13)の黄の適用対象は「裏，裳」のような繊維製品である。例(20)の「黄黄」について，朱子は「黄黄，狐裘色也」とある。これも着るものの色を指している。例(6)は「桑」，例(19)，(23)は「華」，例(24)は「草」，例(26)の「黄茂」は皆それぞれ植物，穀物の色を指している。朱子は「黄茂，嘉穀也」とある。例(7)，(12)，(15)，(30)，(31)は馬の色が黄色を指している。例(8)は黄色い糸を指している。例(25)の「黄流」は「黄流，鬱鬯也」とある，お酒の色を表わしている。例(29)の「黄熊」は動物熊の色を表わしている。例(14)の「黄耆」について，朱子は「黄，老人髮復黄也。耆，老人色如浮垢也」とある。例(27)の「黄耆」について，「黄耆，老人之稱」とある。従って，「黄耆」は黄髮黒面，長寿老人の象徴である。例(32)，(33)の「黄髮」も老人を指している。『説文』には「黄，地之色也」とある。「黄」の適用対象は，「鳥，馬，華，草，熊，髮」などの自然物から，「裳，裏」などの繊維製品に及ぶ。「黄」の適用対象はとても広く，限定されていないため，基本色彩語彙である。なお「黄」の下位カテゴリーは『詩経』では見られない。

## 2.5 青色類

### 2.5.1 青

「青」について、『詩経』に8例が見られる。

- (1) 瞻彼淇奥，緑竹青青。(淇水の隈を見渡せば，緑の竹ぞ生い茂る。)[衛・淇奥]
- (2) 青青子衿，悠悠我心。(青い色した主の襟，はてない私が往かずとも。)[鄭・子衿]
- (3) 青青子佩，悠悠我思。(青い色した主の佩び，はてしない私のもの思い。)[鄭・子衿]
- (4) 俟我於庭乎而，充耳以青乎。(我待つと土間に立つひとつ，耳宛に青なる組み糸。)[齊・著]
- (5) 營營青蠅，止于樊豈。(青ハイは羽音を立てて，樊に止まる。)[桑扈之什・青蠅]
- (6) 營營青蠅，止于棘讒。(青ハイは羽音を立てて，垣のいばらに。)[桑扈之什・青蠅]
- (7) 營營青蠅，止于榛讒。(青ハイは羽音を立てて，垣のはしばみに。)[桑扈之什・青蠅]
- (8) 苕之華，其葉青青。(のうぜんかずら，その葉は茂る。)[都人士之什・苕之華]

「青」の適用対象は，自然物から人工物までである。例(1)の「青青」について，朱子は「青青，堅剛茂盛之貌」とある。例(2)の「青青」について，朱子は「青青，純縁之色」とある。例(3)の「青青」について，朱子は「青青，組綬之色」とある。「青衿」とは「青」に染められた着物の襟のことである。「青青子佩」も青々とした紐の色を指している。『説文』には「藍，染青草也」とある。ここでの「青」は blue を表わしていると言える。例(5)，

(6), (7)の「青蠅」について、朱子は「青蠅，汙穢能變白黒樊藩也。詩人以王好聽讒言，故以青蠅飛聲比之」とある。ここでは「讒言」に喩えている。例(8)の「青青」も「盛貌」という意味で、植物が茂っていることを表わしている。『釋名』釋綵帛に「青，生也。象物生時色也」とある。したがって、「青」は本来植物が繁茂した状態を表わしていた。ここでの「青」は green であったと考えられる。基準①に従い、「青青」は、単一形態素「青」の重ね型としてみる。「青」は基本色彩語彙である。

## 2.5.2 蒼

「蒼」は『詩経』で13回現れた。例9は3回現れた。その例文は以下のようになる。

- (1) 悠悠蒼天，此何人哉。(青雲の遥かな天よ，ああこれは誰のしわざか。)「王・黍離」
- (2) 悠悠蒼天，此何人哉。(青雲の遥かな天よ，ああこれは誰のしわざか。)「王・黍離」
- (3) 悠悠蒼天，此何人哉。(青雲の遥かな天よ，ああこれは誰のしわざか。)「王・黍離」
- (4) 匪雞則鳴，蒼蠅之聲。(鶏ではないよ，蠅の声だ。)[齊・雞鳴]
- (5) 悠悠蒼天，曷其有所。(仰げば遠い青空よ，いつか落ち着く日もあるか。)[唐・鴝羽]
- (6) 悠悠蒼天，曷其有極。(仰げば遠い青空よ，いつか定まる日もあるか。)[唐・鴝羽]
- (7) 悠悠蒼天，曷其有常。(仰げば遠い青空よ，いつかおさまる日もあるか。)[唐・鴝羽]
- (8) 蒹葭蒼蒼，白露為霜。(あしの葉はあおあおとして，白露はいつか置く霜。)[秦・蒹葭]
- (9) 彼蒼者天。(こころなき天は。)[秦・黃鳥]

- (10) 蒼天蒼天，視彼驕人。(天よ天よ，驕るやからを見そなわし。)  
「節南山之什・巷伯」
- (11) 靡有旅力，以念穹蒼。(おもう力も尽き果てた，仕方がなく大空に  
祈るしかない。)  
「蕩之什・桑柔」

「蒼」の適用対象は「蠅，蒹葭」以外，多くは「天」となっていた。例(5)，(6)，(7)の「蒼天」について毛伝は「遠者，蒼蒼之上天」とある。例(8)の「蒼蒼」は「盛也」とあり，例(11)の「穹蒼」は「蒼天」とある。朱子は「蒼天者，據遠而視之蒼蒼然也」とある。天とは遥か遠くにあるもので，その天を遠くから眺めれば「蒼蒼然」に見えるため，「蒼天」という。『爾雅』釋天には「春為蒼天」とある。郭注に「萬物蒼蒼然生」とある。『説文』には「蒼，草色也」とある。つまり，「蒼」は「青」と同じように「万物」が生まれ出る時の色なのである。植物の茂っている状態とも表わしていると考えられる。

### 2.5.3 緑

「緑」は『詩経』で10回現れた。例(1)，(2)はそれぞれ2回が現れた。

- (1) 緑兮衣兮，緑衣黄裏。(緑の衣 緑の衣に黄の裏よ。)  
「邶・緑衣」
- (2) 緑兮衣兮，緑衣黄裳。(緑の衣，緑の衣に黄の裳。)  
「邶・緑衣」
- (3) 緑兮絲兮，女所治兮。(衣を緑に染めるのも，みなあの方のなさるわざ。)  
「邶・緑衣」
- (4) 瞻彼淇奥，緑竹猗猗。(淇水の隈を見渡せば，緑の竹ぞうるわしき。)  
「衛・淇奥」
- (5) 瞻彼淇奥，緑竹青青。(淇水の隈を見渡せば，緑の竹ぞ生い茂る。)  
「衛・淇奥」
- (6) 瞻彼淇奥，緑竹如簣。(淇水の隈を見渡せば，緑の竹はスノコなす。)  
「衛・淇奥」



- (7) 終朝采緑，不盈一匊。(朝の間にカリヤス刈り，掬ぶ手の一つにならず。)  
「都人士之什・采緑」
- (8) 朱英緑滕，二矛重弓。(二つの矛には朱の飾り，重ねし弓は緑のひも  
まとい。)  
「魯頌・閟宮」

「緑」の適用対象は「絲，衣，滕」という人工物である。『説文』には「帛青黄色也」とある。所謂，染色された絹織物そのものを表わしているといえる。この場合，「緑」は色彩語彙ではない可能性がある。例(1)の「緑」について，朱子は「緑，蒼勝黄之間色。黄，中央土之正色。間色賤而以為衣，正色貴而以為裏，言皆失其所也」とある。例(7)の「緑」について，朱子は「緑，王芻也」とあり，植物の名前を指す。例(4)，(5)，(6)の「緑」について，朱子は「緑，色也」とある。朱子の説をとれば，「緑」はすでに色彩語彙として用いられていたと考えられる。いずれにしても，「緑」は基本色彩語彙ではないと考えられる。

#### 2.5.4 葱

「葱」は『詩経』では1回しか現れなかった。

- (1) 朱芾斯皇，有琤葱珩。(あかの前垂かがやかに，青色の玉の音も清し。)  
「彤弓之什・采芑」

朱子は「葱，蒼色。如葱者也」とある。「葱」は「蒼」の下位カテゴリーであると考えられる。「葱」のような青色を指していた。『爾雅』釋器には「青謂之蔥，黑謂之黝」とあるが，ここの「葱」は「淺青」をさしている。

#### 2.5.5 青色類のまとめ

「蒼，緑，青，葱」の適用対象は以下のようにまとめられる。

	『詩経』での適用対象	『詩経』	『説文』
青	竹, 衿, 佩, 耳, 蠅, 葉	染色, 盛貌	東方之色也
蒼	蠅, 蒹葭, 天	天の色, 茂る状態	草色也
緑	絲, 衣, 滕, 竹	染色した絹織物	帛青黄色也
葱	飾り物の珩	青色, 浅青	菜也

図4

「蒼, 緑, 青, 葱」の適用対象からみると, 「緑」と「葱」の適用対象が限定されていて, 基準④には抵触するため, 基本色彩語彙として考えられない。五色では「青」は正色であり, 当然基本色彩語彙である。しかし, 「青」と「蒼」は同じカテゴリーを表わす傾向がある。「青」と「蒼」はいずれも blue と green を含めている。つまり, 当時 blue と green はまだ分化されていないと考えられる。『詩経』において, 「青」は「佩」, 「衿」を修飾し, 染色として使われていた。『荀子・勸学』に「青取之于蓝而青于蓝 (青は藍より出でて藍よりも青し)」とあり, 昔は青色を藍色から取ったのである。ここでの「青」は藍染の色を指している。従って, ここでの「青」は blue を指している。「蒼」について, 『説文』には「蒼, 草色也」とあり, ここでの「蒼」は green を指している。しかし, 『詩経』において, 「蒼」が頻繁に「天」を修飾した。

### 3. むすび

以上のように『詩経』において「黒, 玄, 幽, 緇, 白, 素, 鶩, 皓, 皎, 赤, 朱, 赭, 赭, 赫, 奭, 彤, 煒, 黄, 蒼, 緑, 青, 葱」の22語について調べた。

Berlin と Kay の基本色彩語彙の基準に従い, 「黒, 白, 赤, 黄」この四つの語彙が『詩経』での適用範囲は広く, 基本色彩語彙であることが明らか

かである。周代にはすでに確立していた基本色彩語彙は「黒、白、赤、黄」である。

「青」と「蒼」の色彩語彙としての地位は、かなり接近していたのではないかと考えられる。『詩経』の「青」は人工物にも用いられ、染色と関わりがある。蒼は『説文』には「草色也」と記述されているように、ひたすらに自然物を修飾することが考えられる。「蒼」が「天」の色について、頻繁に使われている。「青」が人工色も表わすのに対し、「蒼」は、自然色を表わす傾向があると思われる。

また「玄」は「黒」の下位カテゴリーで、「朱」は「赤」の下位カテゴリーと思われる。「黄」の下位カテゴリーは、ここではみられない。

勿論、『詩経』のみを資料とし、周代の基本色彩語彙を調べるのがまだ不十分である。また注について、今回は主に朱子の注を中心に参考した。今後朱子以外の解説をも参考し、『詩経』の基本色彩語彙体系を明らかにしたいと考える。

#### 参考文献

- 朱熹集注（1130～1200）出版年限不明『詩経集註』仿古字版 香港廣智書局出版
- 祝敏彻 赵浚 刘成德等译注 1984 『诗经译注』甘肃人民出版社
- 目加田誠訳 1969「詩経・楚辞」『中国古典文学大系(15)』平凡社
- 野口定男訳 1969「史記」『中国古典文学大系(10 11 12)』平凡社
- 竹内照夫訳 1969「礼記」『中国古典文学大系(3)』平凡社
- 許慎(30～)『説文解字』中華書局影印 1979
- Kay, Paul 1975 Synchronic variability and diachronic change in basic color terms. *Language and Society* 4(3) : 257 - 270
- Kay, Paul. and Chad K. McDaniel 1978 The linguistic significance of the meanings of basic color terms. *Language* 54(3) : 610 - 646
- 劉渴水 2005「中国語色彩語の象徴化」『人文研究』(156号) 神奈川大学人文学会
- 胡奇光 方环海撰 1999 『尔雅译注』上海古籍出版社